

第 8 章

補益剤（ほえきざい）

補益剤とは、補益薬を主体にして正気の不足である虚証を改善する方剤であり、扶正剤・補剤ともいう。《内経》の「虚はすなわちこれを補う」「損すればこれを益す」「形の不足は、これを温むるに気をもってし、精の不足は、これを補うに味をもってす」などを理論的根拠とし、「八法」のうちでは「補法」に属する。

正気は陽気（陽・気）と陰液（陰・血・津液・精）からなり、正気の不足は先天不足や後天失調（飲食不節・労倦・七情内傷・六淫侵襲などによる消耗や病後失調）によって発生し、消耗した正気の違いにより虚証は気虚・陽虚・血虚・陰虚（津虚や精虚を含む）に大別できる。気虚には補気（益気）・陽虚には補陽（温陽・壮陽・助陽）・血虚には補血（養血）・陰虚には補陰（滋陰・養陰）の治法を用いるが、病変部位や臓腑の違いにより具体的な内容はやや異なる。また、気と血および陰液と陽気には相互資生・相互依存の密接な関係があるので、一方の不足は他方の不足をひきおこし、気血両虚・気陰両虚・陰陽両虚が発生する。この状態には、それぞれ気血双補・気陰双補・陰陽双補の治法を用いる必要がある。

ただし、「血は自ずと生ぜず、すべからく陽気を生むの薬を得て、血は自ずと旺ずべし」「血虚は人参をもってこれを補い、陽旺ずればすなわち陰血生ず」といわれるように、補血剤に補気薬を配合して生化を助けたり、補気に重点をおいて養血する必要もある。逆に、補気薬に少量の補血薬を配合すると、気がよりどころを得て、補気の効果がよくなる。

また、「よく陽を補う者は、必ず陰中に陽を求む、すなわち陽は陰助を得て生化究まりなし、よく陰を補う者は、必ず陽中に陰を求む、すなわち陰は陽昇を得て泉源竭きず」と張景岳が指摘したように、補陽剤に補陰薬を配合すると、陽気がよりどころを得るとともに、陰薬の滋潤によって陽薬の温燥が制約され、温煦生化を順調に行うことができ、補陰剤に補陽薬を配合すると、陰液が生化することができ、陽薬の温運によって陰薬の凝滞を防ぐことができる。このように、気血・陰陽を全面的に考慮してはじめて効果があがる。

このほか、補益法の運用においては脾胃の運化に注意すべきである。常服・久服

する場合には、健脾・和胃・理気などの薬物を配合して運化をつよめ、薬物を吸収し利用しやすくすることが大切である。虚実の真仮を誤らないようにすることも重要である。古人が「大実の病，かえって羸状あり，至虚の病，かえって盛候あり」と指摘しているように，真実仮虚に対して補法を用いたり，真虚仮実に瀉法を使用すると，「虚を虚し，実を実す」の誤りを犯して危急状態を招くことになる。

第1節 補気剤（ほきざい）

補気剤は気虚を改善する方剤で、益気剤ともいう。

気虚の主体は脾気虚・肺気虚で、倦怠無力感・疲れやすい・息ぎれ・声に力がない・物を言うのがおっくう・食欲不振・自汗・脈が無力などが主症状で、脱肛・子宮下垂などを呈することもある。

常用の補気薬は人参・党参・黄耆・白朮・炙甘草などであり、病状に応じて行気・滲湿・補血などの薬物を配合する。

四君子湯（しくんしとう）

《和剤局方》

[組成] 人参6g 白朮9g 茯苓9g 炙甘草6g

[用法] 水煎服。生姜・大棗を加えてもよい。

[効能] 益気健脾

[主治] 脾気虚

疲れやすい・元気がない・食欲不振・消化が悪い・泥状～水様便・排便の回数が多い・顔色が萎黄・声に力がない・四肢の無力感・舌質が淡で嫩・舌苔が白・脈が無力など。

[病機] 飲食不節・労倦などにより脾気が衰え、運化が不十分になり気血の生化が不足した状態である。

脾気が虚して運化が低下するので、食欲がない・消化が悪い・泥状～水様便・排便の回数が多いなどが主症状になる。脾運不足で気血の生化が不足するために、疲れやすい・元気がない・声に力がない・脈が無力などの全身的な気虚の症候がみられる。脾は四肢を主り、脾気が虚すと四肢の無力感があらわれる。脾運が不足して水湿が停滞するので、舌質はやや胖・舌苔は白を呈する。

[方意] 脾を健運することにより全身の気血を養う必要がある。

甘温の人参は、元気を大補し脾気を補養する主薬である。苦甘温の白朮は健脾燥湿に、甘淡の茯苓は健脾滲湿に働き、共同して脾運を促進する。甘温の炙甘草で調中益気する。全体で益気健脾の効能が得られ、人参・炙甘草の保津と

白朮・茯苓の燥湿が相反相成して弊害がない。

[参 考]

- ① 原著には「営衛気虚し、臟腑怯弱し、心腹脹満し、全く食を思わず、腸鳴泄瀉し、嘔噦吐逆するを治す。大いに宜しくこれを服すべし。……常服すれば、脾胃を温和し、飲食を進めて益し、寒邪、瘴霧^{のそ}気を辟く」と記される。
- ② 本方は、「後天の本」「気血生化の源」である脾の運化を補助するところから、補気剤の基本になっている。平淡で偏りがないため、多くの補気剤が本方をもとにして作成されている。
- ③ 《医方考》に「それ面色萎白なれば、すなわちこれ望みてその気虚するを知る、言語軽微なれば、すなわちこれを聞きてその気虚するを知る、四肢無力なれば、すなわちこれを問いてその気虚するを知る、脈来虚弱なれば、すなわちこれを切してその気虚するを知る。かくのごときはすなわち気を補うべし」とある。
- ④ 本来は人参を使用すべきであるが、中国では気虚の重症や気不摂血以外には党参で代用している。白朮と茯苓の配合は、白朮が水湿の運化をつよめ、茯苓が排泄をつよめるので、脾虚湿滯に対し非常に有用である。

附 方

1. 異功散（いこうさん）《小兒藥証直訣》

組成：四君子湯に陳皮9gを加える。生姜・大棗と水煎服。

効能：益気健脾・理気^{のそ}和胃

主治：脾気虚・気滯。

四君子湯に芳香理気・和胃の陳皮を加え、より全面的な脾気虚の方剤になっている。

原著には「温中和気し、吐瀉し乳食を思わざるを治す。凡そ、小児の虚冷病には、先ず数服を与え、以てその気を助ける」とある。

2. 保元湯（ほげんとう）《博愛心鑑》

組成：黄耆21g、人参6g、肉桂3g、炙甘草5g、生姜3g。水煎服。

効能：益气温陽

主治：元気不足による、倦怠無力感・息ぎれ・寒がるなどの症候。

黄耆・人参・炙甘草で益気し、温通の肉桂・生姜で薬力を補助する。燥湿の白朮・茯苓を除いているのは、湿邪が介在しないからである。

魏桂岩の原著には肉桂の記載がないが、現在は《景岳全書》の記載に基づき肉桂を加える。《古今名医方論》には「気虚血弱治療の総方」とあり、「柯韵伯曰く：保元は保守その元気の謂いなり。……また外は皮毛に応じ、営衛

を^あ協わせ、而して一身の表を主るものは、太陽膀胱の気たり；内で五臓に通じ、治節を司り、而して一身の裏を主るものは、太陰肺経の気たり；内外を通行し、腠理に応じ、而して一身の半表半裏を主るものは、少陽三焦の気たり。これ先天の元気を分け而して三となすなり。この方は黄耆を用いて表を護り、人參で裏を固め、甘草で和中し、三氣治まりて元気足るなり。昔李東垣はこの三味を以て、よく瀉火、補金、培土し煩熱を除く聖薬となす；小児の驚を鎮め、効果は桴鼓の如し。魏桂岩はこれを得、以て痘家の陽虚して頂陷し、血虚して癩清、皮薄く痒を發し、灌ぎ難く^{おさま}斂り難きを治し、始終これを用いる。以て血脱たるは須く補氣すべし、陽生じれば則ち陰長じ、起死回生の功あり、故にこれを名して保元となすなり。また少し肉桂を佐とし、四時の氣に分け而してこれを増損す、桂は能く血を治め、以てその毒を推動し、扶陽益氣して周身に充達する。血内に在り、これを引いて表に出すは、則ち氣の内托に従う；血外に散じ、これを引いて根に帰すは、則ち氣の外護に従う。參耆は桂の引道非ざれば、独りその功を^た樹てる能わず；桂は甘草の和平氣血を得ざれば、またその条理（筋道）に^{したが}緒う能わず。^{かなら}要^{かなら}ず寡聞淺見に非ざるは、よくその万一を窺うなり。四君中の白朮を用いざるは、その燥を避け；茯苓を用いざるはその滲を恐れるなり。桂を用いて四物を用いざるは、芍の辛散、芎の湿潤、芍の酸寒、地黄の泥滯なるが故のみ。もし燥すべきは則ち苓・朮を加え、潤すべきは芎を加え、収むべきは芍を加え、まさに散すべきは芍を加える。また表実^は耆を去り、裏実^は參を去り、中滿は甘を忌み、内熱は桂をのぞく、かくまたまさに理会（注目）すべし」と詳細な説明がある。

3. 七味白朮散（しちみびやくじゅつさん）《小兒薬証直訣》

組成：人參 6g、炒白朮 15g、茯苓 15g、藿香 12g、葛根 15g、木香 6g、甘草 3g。水煎服。

効能：益氣健脾・止瀉・和胃止嘔

主治：脾胃氣虚に湿濁中阻をともない、嘔吐・腹滿・腹痛・下痢などを呈するもの。

四君子湯に藿香・葛根・木香を加えたものに相当し、藿香は芳香化濁・祛湿止嘔に、葛根は胃氣を鼓舞して昇清止瀉に、木香は行氣止痛・止瀉に働く。

原著には白朮散として、「脾胃久しく虚し、嘔吐泄瀉頻りになして止まず、精液苦竭し、煩渴して躁ぎ、ただ飲水を欲して、乳食進まず、羸瘦して困劣（衰える）し、因りて治を失すれば、變じて驚癇を成す。陰陽虚実を論ぜずして、並に^{とも}宜しく服すべし」と記載され、「熱甚だしく渴きを發するは、木香を去る」と注がある。

六君子湯（りっくんしとう）

《医学正伝》

〔組成〕 人参6g 白朮9g 茯苓9g 半夏9g 陳皮6g 炙甘草3g 生姜6g
大棗2g

〔用法〕 水煎服。

〔効能〕 補気健脾・和胃降逆・理気化痰

〔主治〕 脾胃気虚・痰湿

元気がない・疲れやすい・四肢の無力感・食欲不振・消化が悪い・少食あるいは食べられない・悪心・嘔吐・腹満・慢性の咳嗽や喘鳴・多痰・泥状～水様便・舌質が淡胖で嫩・舌苔が白膩・脈が無力など。

〔病機〕 脾の運化と胃の受納の両面が不足した脾胃気虚で、運化不足による痰湿の生成もみられる。

脾胃気虚の症候（四君子湯参照）とともに、少食・食べられないなど胃の受納不足や悪心・嘔吐・腹満など胃気上逆の症候がみられる。一般に、脾胃気虚が進行して胃気にも波及すると、脾胃気虚があらわれる。さらに、脾運不足により水湿が停滞して痰湿を形成し、「脾は生痰の源、肺は貯痰の器」で肺に影響が及ぶと、慢性の咳嗽・喘鳴・多痰など痰湿阻肺の症候が生じる。舌質が胖・舌苔が膩は痰湿をあらわしている。

〔方意〕 健脾益気を基本にし、和胃降逆により胃納を回復させ痰湿を除去する。

本方は益気健脾の四君子湯（人参・白朮・茯苓・炙甘草）と和胃降逆の小半夏湯（半夏・生姜）の合方で、さらに陳皮・大棗が加えられている。和胃降逆・止嘔の半夏・生姜・陳皮で胃気を通降させて受納を回復し、大棗・生姜で営衛を調和させるのである。なお、半夏・陳皮・生姜は理気化痰・止咳に、白朮・茯苓は化湿利水に働き、痰湿を除去することにより喘咳・多痰を改善する。

〔参考〕

- ①《名医方論》に「気虚は、甘をもってこれを補う。参・朮・苓・草は、甘温益胃し、健運の功を有し、衝和の徳を具う、ゆえに君子となす。もしこれに二陳を合すれば、すなわち補中にやや消導の意あり。けだし人の一身は、胃気をもって本となし、胃気旺んれば、すなわち五臓は蔭を受く、胃気傷るれば、すなわち百病叢生す。ゆえにおよそ病久しく癒えず、諸薬効せざるは、ただ益胃と補腎の両途あるのみ、ゆえに四君子を用い随証加減す。寒熱補瀉を論ずることなく、まず中土を培い、薬気をして四達せしむれば、すなわち周身の機運は流通し、水穀の精微は敷布す、いづくんぞその薬の効せざるを患わんや。これ四君・六君は司命の本たると知るなり」と述べている。

② 本方は和胃降逆と補気の組合せであり、胃気虚の基本方と考えてもよい。

附 方

1. 香砂六君子湯（こうしゃりつくんしとう）《明医雑著》

組成：六君子湯に木香・砂仁・藿香各 2.5g を加える。水煎服。

効能：益気健脾・理気^{りき}和胃・止痛

主治：脾胃気虚の寒湿阻滯で、噯気・嘔吐・腹満・腹痛・下痢などを呈するもの。

理気止痛・化湿止瀉の木香と、温胃止嘔・理気止痛・止瀉の砂仁を配合し、吐瀉・腹痛・腹満を解消する。

《医宗金鑑》には「柯琴曰く：経に曰く‘壮なるものは気行り則ち癒え、怯なるものは著きて病をなす’と。けだし人は気交の中に在り、氣に因りて生じ、而して氣の生じるは総べて胃氣を本とす。もし脾胃ひとたび和せざれば、則ち氣便く着して滞り、或いは痞悶噦嘔し、或いは生痰留飲す；因りて飲食を思わず、肌肉消瘦して諸証蜂起して形消え氣息む。四君子は気分の総方なり。人参は衝和の氣を致し、白朮は中宮を培い、茯苓は治節を清し、甘草は五臓を調え、胃氣すでに治せば、病いづくんぞよりて来たるや。然るに乱を撥め正しきに反すに、また為す無くして治す能わず、必ず大に行氣の品を挙げてこれを輔ければ、則ち補うも泥して行らざるに至らず。故に陳皮を加えて肺金の逆氣を利し、半夏は脾土の湿氣を疏けば、痰飲は除きうるなり；木香で三焦の滯氣を行らし、縮砂で脾腎の元氣を通じれば、臍鬱は開きうるなり。君は四輔を得て、則ち功力倍して宣び、四輔は君を奉り、則ち元氣大いに振るう、相得て益彰かなり」と解説がある。

2. 楂麴六君子湯（さきくりつくんしとう）《医編》

組成：六君子湯に山楂子・神麴・麦芽各 6g を加える。水煎服。

効能：益気健脾・和胃降逆・消導理気

主治：脾胃気虚の食滯・氣滯。

理気消導の山楂子・神麴・麦芽を加え、消化をつよめる。

3. 黄連六君子湯（おうれんりつくんしとう）《医統正》

組成：六君子湯に姜汁炒黄連 3g を加える。水煎服。

効能：益気健脾・清熱化痰

主治：脾胃気虚・痰湿化熱で吞酸・胸やけなどを呈するもの。

姜汁炒黄連を加え、半夏・陳皮とともに清熱化痰する。呉茱萸を加えて左金丸の方意を附加すると、胃痛にも奏効する。